

子どもの世界をとらえる

想像する自分

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方を紹介いただきます。

奥村 高明
 おくむら・たかあき
 聖徳大学児童学部教授。
 1958年宮崎県生まれ。
 小・中学校教諭、美術館学芸員の後、
 文部科学省教科調査官として
 学習指導要領の作成に携わる。
 専門は図画工作・美術教育、
 鑑賞教育など。芸術学博士（筑波大学）。
 『子どもの絵の見方～子どもの世界を
 鑑賞するまなざし～』（東洋館出版社）、
 『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』
 （美術出版社）など、著書多数。

見れば見るほど不思議な絵

展覧会や講演会で子どもの絵を選んだとき、よく聞かれるのが「なぜ、あの絵ですか」である。

申し訳ないが、正直わからない※1)。絵を見たときに真っ先に飛び込んでくるのは「引っかけた」とか「なんとなく」などの、理屈とはいえない感情や気持ちである。でも自分がそう思った理由は、絵の中にちゃんとある。

この絵の第一印象は「不思議」だ。私は右ページの1～4のように見ていった。そして、見れば見るほど不思議さは増していった。

学習過程と主題という観点から

この絵を、学習過程と主題の二つの観点からまとめてみよう。

学習過程からいえば、これは下絵、彫り、刷りの手順を踏んだドライポイントの授業だ。下絵のとき、いくつかの図版や自分の写真などを組み合わせ合わせたのだろう。それが不思議な空間を構成したのではないか。

主題からいえば、自分と魚には何かしらの意味がある。作者は将来、魚に関する仕事に就きたいのかもしれない。でも、それほど強い意志が感じられるわけでもない。何か考え込むような空気が流れている。いったい何を表したかったのだろう。

その後、作者とメールでやり取りをして、私の謎は全て解ける。私の「不思議」は、この子の画面の構成のプロセスと、そこに込められた思いが原因だった。以下は、作者からのメールを抜粋したものである。

**これは、いくつかの写真や絵を
紙に貼り、その上にプラスチック板
を重ねて彫るドライポイントです。**

3年生のときに制作しました。

授業のテーマは「自分」で、将来や趣味を描くものでした。まず全員がそれぞれ好きなポーズをとって写真を撮ります。私は机に肘をついてもたれている姿勢を撮りました。何かを考えたり、想像したりしている感じにしたかったからです。

私の趣味は釣りなので、用意したたくさんの魚の写真と自分の写真を見比べてみました。すると、魚が同じ方向を向いていることに気づき、「今の自分たちと同じだな……」と思いました。高校受験や就職など、将来の道はそれぞれ違うけど、夢という光に向かって前へ進む私たちは、同じ方向に向かって進む魚たちとよく似ていると感じました。

肘をついている自分が、それを眺めているように見せるために、水槽を描きました。水槽を一つの海とたとえば、その中で泳いでいる魚たちは中学校のときのクラスメイトや友人ということになります。描きたかったのは、同じ方向（将来）に向かって進む魚たち（自分たち）、楽しかった中学校生活です。だから魚や自分は特に丁寧に彫りました。

絵を見るという行為は、「観手」※2)と「作品」の相互行為である。このとき「観手」側に生まれる感情や気持ちは勝手なものではない。作品をつくりだしたその子の学習過程や思いから生まれている※3)。改めて、それを実感する作品だった。

※1 指導という観点からは「子どもの声」と「先生の声」がバランスよく聞こえてくる作品を選ぶようにしている。子ども：先生＝8：2くらいだろうか。

※2 鑑賞者を主体的に表すために長田謙一が創作した言葉。『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』（奥村高明・長田謙一監訳 美術出版社）P37より

※3 社会的な背景や学校制度、授業の文脈などもある。



「将来を想像する自分」
 紙、ドライポイント
 38.2×27cm
 『美術2・3下』
 P18に掲載

私はこの絵を、次の1～4のように「描かれた事実」と「解釈」に分けて、見ていった。

1 事実 人物は水槽に寄りかかっているように描かれているが、この大きさの水槽に寄りかかるのには無理がある。人物の右手、左手の肘、胸の三点は同じ位置にあり、大きな「平面」が想定できる。
解釈 おそらく「平面」は大きな机で、そこに肘をついた人物を描いたのだろう。そして、そこに、水槽を合成したのだろう。そのため水槽が「平面」の下に伸びているように見えるのだろう。

2 事実 題名は「将来を想像する自分」。描かれたのは自分自身だが、大きな鏡がないと描けないポーズだ。
解釈 誰かに撮影させた自分の写真を見て描いたのではないか。

3 事実 水槽は投影図法の直方体で、砂や砂利が水槽の側面や底面と一致していない。海水性の魚を入れるのに必要な循環器やライト等がない。水に透明感がなく、水槽の向こう側が描かれていない。
解釈 観察して描いた水槽ではないだろう。何か象徴的な意味があるのではないか。

4 事実 イワシ、カツオ、イカ……一つ一つ細部まで描かれ、右向きで、一か所に集まっていくように配置されている。餌に群がって泳ぐ姿ではない。
解釈 事典等にある魚の図版を一つ一つはめ込むように描いたのだろう。海水性の魚を飼うほどのマニアではないが魚は好きで、魚を描くことやその方向性に何か思いがあるのではないか。